ひといき

老子を英語で読んでみよう－2

大阪大学名誉教授　長谷川　晃

４月号で老子第１章と第２章を英語で読んでみた。英語で読むことで下手な現代語和訳よりは遥かに分かりやすく理解できたことと思われる。英訳には今回もGia-Fu Feng and Jane English, Vintage Books, New York, NY.（1972）を使うことにする。前号でも書いたが、日本文化の根元には自然との共存をベースとする心の面と、恥や礼を重んじる形の面の二面性がある。ある意味相反する二つの面は縄文と弥生文化から来ていると思われる。そして、大変面白いことにこれらの二面はそれぞれ中国の老子と孔子がうまく文書で表現してくれている。

私が老子を取り上げるのは縄文時代に誕生した日本人の「心」を上手く記述してくれているからだ。前号で紹介した老子第一章と第二章でこの意味がある程度ご理解いただいたことと思う。第１章では老子が基本とする自然の摂理を表す「道」―Tao―が言葉で表し得ないことを説く。宇宙が誕生した時のは名はなかった、名を産んだのは万物の母である、とし、老子の母性文化重視を表現している。続く第２章では善が意味を持つのは悪があるからだとし、絶対性を否定する考えが紹介される。物事には絶対的な基準はなく、全て相対的に評価されると解く、この考えは20世紀の物理学の考えに通じる。母性を重視し、絶対性を否定する老子の考えは、父性を重視し、絶対性を重んじる孔子やユダヤキリスト教文明の考えを真っ向から否定する。そうして多くの日本人の心の底にあるこうした父性文明に対する違和感と同調する。

今回は老子81章の結論部分である第80章、第81章を中心に紹介し、このことの理解を深めたい。

老子下篇 第80章

小国寡民、使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徒、雖有舟輿、無所乗之、雖有甲兵、無所陳之。使人復結縄而之用、甘其食、美其服、安其居、楽其俗、鄰國相望、鶏犬之聲相聞、民至老死、不相往来。

Gia-Fu Feng and Jane Englishによる英訳

A small country has fewer people. Though there are machines that can work ten to a hundred times faster than man, they are not needed. The people take death seriously and do not travel far. Though they have boats and carriages, no one uses them. Though they have armor and weapons, no one displays them. Men return to the knotting of rope in place of writing. Their food is plain and good, their clothes fine but simple, their homes secure; They are happy in their ways. Though they live within sight of their neighbors, and crowing cocks and barking dogs are heard across the way, yet they leave each other in peace while they grow old and die.

小国寡民とは人口まばらな小さな国を意味する。そこでは十倍百倍の仕事をしてくれる道具があるのに人々はこれを用いることはない（使有什伯之器而不用）－A small country has fewer people. Though there are machines that can work ten to a hundred times faster than man, they are not needed－、と説く。この章は中国で古来桃源郷として知られていた東方の理想国家を老子なりに紹介する文であると見ることができる。実際、秦（しん）の始皇帝はこの理想国家にあるとされていた不老不死の薬を求めて徐福（じょふく）に３,000人の部下をつけて送り出したとされており、日本各地に徐福の痕跡が存在する。しかし、彼らはついに秦には戻らなかった。おそらく日本に住み着いたのであろう。この話は老子から300年ほど下ることの紀元前210年頃である。この章を読んでゆくと、この桃源郷の老子的な解釈が浮かび上がる。本文に戻ろう。

続いて、人々は死を重く受け止め、遠方には出てゆかない（使民重死而不遠徒－The people take death seriously and do not travel far－）。船や車があっても乗る者はなく（雖有舟輿、無所乗之－Though they have boats and carriages, no one uses them－）、甲冑や兵器があってもそれらを見せびらかさない（雖有甲兵、無所陳之－Though they have armor and weapons, no one displays them）と説く。この国での人々が自然の中で平和に暮らしている有様を説いている。もちろん老子がこの国に出かけたわけではなく、噂に聞く桃源郷国家を彼なりに理想化して記述しているのであろう。ここでは老子がこの国の人々の生活様式が当時の新しい道具を持っていても使わない、武器なども見せびらかして相手を威圧しない、そして平和で簡素な生活を好むと述べている。日本の里の田園風景が目に浮かぶ記述ではないか。

続いて、人々は縄の結び目に復（もど）って文字の代わりにする（使人復結縄而之用－Men return to the knotting of rope in place of writing－）。食物はシンプルだがうまく、衣服は美しく、住居は安全で、その風習を楽しむ（甘其食、美其服、安其居、楽其俗－Their food is plain and

good, their clothes fine but simple, their homes secure; they are happy in their ways）と説く。ここで人々は縄の結び目に復（もど）って文字の代わりにするとあるのは、まさに日本の縄文文化を表していると解釈できる。そして、ここに記されている人々の風習は縄文社会を彷彿とさせるものではないか、私は、本学出身の上田篤先生から老子80章が縄文日本を表しているという話を聞き、感動したものだ。老子は縄文日本の人々の生活模様を実にうまく表現し、彼の理想郷としたのだ。老子が全81章で「母性文化」の良さを紹介し、絶対性を否定し、自然を重視し、「無」の重要性を説いてきた後に、こうした老子の考えを実践する具体的な国家として当時の日本を小国寡民として紹介したと解釈できる。実に素晴らしいことではないか。

続いて言う、人々は隣人達の望める場所に住まい、鶏や犬の声が相聞こえる場所にいるが、人々は死に至るまでお互いに行き来しない（鄰國相望、鶏犬之聲相聞、民至老死、不相往来－Though they live within sight of their neighbors, and crowing cocks and barking dogs are heard across the way, yet they leave each other in peace while they grow old and die.）と結んでいる。この訳の“leave”は“allow to remain”、つまりそのままに止めるという意味を持つ。不相往来を「お互いに争う事なく平和に暮らしている」と訳している。私は縄文日本を記述する書は他には存在しないと思っている。その意味でこの80章は縄文後期に書かれた実に貴重な記述と言えるだろう。

上の写真は北海道伊達市の郊外にある巨大な貝塚のもので、広角写真でも入りきらない貝殻の山である。近くには竪穴式住居跡が見つかっていて、史跡になっている。この遺跡から分かっている事実は、まず、２軒または３軒程度の住居跡しかなく、せいぜい25人から30人程度の人口しかなかったことだ、この状態はまさに老子の言う鄰國相望、鶏犬之聲相聞、民至老死、不相往来に相当するように思われる。さらに遺跡からわかることは、彼らが当時貴重としていた品物が結構遠方、津軽海峡を隔ったった現在の東北地方まで渡って運ばれていたこと、つまり、81章で老子が言う聖人不積、既以為人つまり、人と分かち合うことが縄文人の常識であったこと、自然の恵、動物も植物も乱獲はせず、足るを知る、生活をしていたことなどが実証されている。興味あることはこうした風習は今なおアイヌの人たちに残っている。また、この貝塚の発掘から、ポリオの子供を長期に介護するなど、家族を大切にしていたこと、さらにまた、貝塚に人骨も埋蔵されていたことから、貝塚はゴミ捨場ではなく、死者を葬り、自然に感謝する場所であったこと、などが分かってきている。実際、この地は海から１キロメートルほどの所にあり、貝殻を海に戻すことはそれほど困難なことではなかったはずだ。老子80章は、この地での縄文人の生活を彷彿とさせるものがある。一万年以上も続いた日本の縄文時代は他国に例のない、平和で安定した時代であり、情緒豊かな日本語と日本人の心が育まれた時代だと思われる。80章が老子が具体的に縄文日本を紹介し、それを賛美したものであることを理解していただけたことだろう。それでは、最後に老子の考えの集大成としての最終章を紹介しよう。

老子下篇 第81章

信言不美、美言不信。善者不辨、辨者不善。知者不博、博者不知。　聖人不積、既以為人、己愈有、既以與人、己愈多。天之道、利而不害、聖人之道、為而不爭。

Gia-Fu Feng and Jane Englishによる英訳

Truthful words are not beautiful, beautiful words are not truthful. Good men do not argue, those who argue are not good. Those who know are not learned, the learned do not know. The sage never tries to store things up. The more he does for others, the more he has. The more he gives to others, the greater his abundance. The Tao of heaven is pointed but does not harm. The tao of the sage is work without effort.

私は老子の中で最も面白いのは始めの２章と最後の２章と思っている。和文読みと英語訳を使ってこの章の持つ意味を紹介しよう。

信言は美ならず、美言は信ならず、「信言不美、美言不信－Truthful words are not beautiful, beautiful words are not truthful－」、信言は信じるにたる言、本当の言葉、これは美しくはない、一方美しい言葉、美言、は不信、つまり、信じられない、ということから始まる老子最終章は「本物」についての老子の考えを説いている章である。この言葉は今でも政治家などのスピーチに通じる事実である。雄弁で滑らかなスピーチは嘘っぽい、訥弁でコトコトと喋る人の話には真実味がある。続く、善者は辨せず、辨ずる者は善ならず「善者不辨、辨者不善－Good men do not argue, those who argue are not good」はこの事を別の言葉で再記したものだ。おしゃべりは不善とはよく言ったものだ。英訳では辨をarugue、つまり、議論すると

か言い争うと訳しているが、この語はおしゃべりするという意味だろう。

続く文は私が好きでよく引用させてもらっているものである。

知る者は物知りではなく、物知りは知らない-「知者不博、博者不知－Those who know are not learned, the learned do not know－」. がそれである。老子は、博学の者、いろんな事をよく知っている者、は実は知らない、つまり本当のことは知らない、悟ってない、と言う。つまり東大生は知らないと言うわけだ。ここで知ると言う意味はそれを本当に自分のものにして、体験として、理解することだ。その上で初めて創造性が生まれ、いい論文が書ける。博学者は紹介文やレビューは書けるが、いい論文は書けない。「知者不博、博者不知」は今なお通じる素晴らしい金言である。私はこの文を好んでよく学生達に引用する。「百科事典のように博学のものは本当のことは知らない」、また逆に、本当のことを知る者は、博学者ではないと言うのは、禅で、例えば「不立文字」として、よく使われる表現で、ここで言う「知る」は悟ると言う意味である。実際老子は物知りのために書いたものではない。さて、ここの博の意味だが、英訳は学ぶと言う語を使っている。そのまま訳すと学んだ人は知らない、知る人は学んでない、となるので意味がもう一つ分かりにくい。しかし、これを学ぶことと知ることは別だと解釈すると分かる。つまり、知者不博は知る人は学ばないではなく、本当のことを知る、あるいは会得することは、学ぶことからは得られないと解釈すると意味が出る。つまり学ぶと言うことが物知りになるだけで終わったのでは真実を知ることにはならないという意味だ。実際勉強して分かったと思ってもそれを他人に説明できないことはよくある。これは分かってないことになる。実際、学ぶことが知識を得ることに終わると、自分のものとして真実を「知る」ことには繋がらない。真実を知ることは自ずからの体験を通してでないと得られない。学ぶことは受け身であり、知ることは能動的である。学問をする上の基本と言える。学ぶことと会得することは別だという意味だ。まさに学問をする上での金言ではないか。

続いて老子は人間としての行き方に言及する。

聖人は積まず「聖人不積-The sage never tries to store things up-」、既（ことごと）く以って人のためにし、己（おの）れ愈（いよいよ）有り、「既以為人、己愈有-The more he does for others, the more he has.-」、既く以て人に與えて、己れ愈多し-「既以與人、己愈多-The more he gives to others, the greater his abundance-」。つまり、聖人、理想的な人物、は「モノ」を貯め込んだりしない、ことごとく人の為にして、そのことで自ずからの価値が上がる。また、ことごとく人に与えて、自ずからが豊かになる。と言う。日本ではよく似た表現に「情けは人のためならず」と言うのがある。日本人社会は世界的に見て貧富の差の少ない社会である。金持ちもいるが途方もない金持ちはいない。ほどほどにしている。誰もがほどほどの暮らしができる社会を望む。これも縄文社会の伝統だろう。

そして老子は最後に言う、天の道は、利して不害、聖人の道は、為して不争「天之道、利而不害、聖人之道、為而不争-The Tao of heaven is pointed but does not harm. the tao of the sage is work without effort-」と。

最後の英訳は和訳と少し違うようだが、「利して」を尖っている（pointed)、としているし、「為して争わず」を努力なしに働くとしている。この文は「天の道は人々に利を与えるが、害はない、聖人の道は人々のためにして、なお、争うものではない」と言う意味だろう。老子71章に似た表現として「知不知上、不知知病」がある。つまり、知っていながら知らないとするのは上、知らないのに知っているとするのは病なりと。

以上で老子80、81章の紹介を終了する。老子が価値を置くものの考え方は今尚日本人の本音の中に生きている。これは、多くの点で、ユダヤ・キリスト教文明や、同じ中国の儒教文明とは根本から違うものである。実際老子は第18章で「大道廃、有仁義」と言って孔子が最重要視する仁や義を批判する。天の与えた、大きな道が廃れたから、仁や義が出現するのだと。さらにまた、第19章では「絶仁棄義、民復孝慈」と言って仁を絶やし、義を捨てれば民は人間が本来持っている両親を敬う心や人を慈しむ心を取り戻すと言う。私はここに縄文人から受け継いだ日本人の心があり、老子はこれを日本人に代わってうまく表現してくれていると思っている。ここに、日本人が心の底に持っている母性文明の根底にある「性善」を見出すことができる。

最後に老子の文の中で今なおよく使われている言葉に73章の「天網恢恢、疎而不失」「天網恢恢疎にして失わず、（あるいはそにして漏らさず）」がある。また、京都錦通り出身の画家、伊藤若冲の名は老子第４章の「道沖、而用之或不盈」の道は沖（空っぽ）なり、から来ている。こうして紀元前５世紀の老子の著は今なお、我々の心の中に生き続けている。

（通信　昭和32年卒　34年修士）